

令和4年度 東御市美術品取得審査委員会  
次第

日時：令和5年3月7日（火）  
午前11時00分から  
場所：市役所本館2階全員協議会室

- 1 開会
- 2 委員長あいさつ
- 3 審議事項  
(1) 令和4年度丸山晚霞記念館の美術品取得（案）
- 4 具申
- 5 その他
- 6 閉会

### 3 審議

#### (1) 令和4年度取得作品(案)について

##### ① 寄贈

No.	作者名	作品名	制作年	技法・材質	サイズ
1	武井 清	春の穂高連峰	不明	油彩 キャンバス	130.3 × 162.0

寄贈



#### 【佐藤聡史 丸山晚霞記念館館長(学芸員) 説明】

本作は、令和4年度企画展での展示作品であり、企画展図録の表紙に使用されたものである。展示終了後、作品の清掃や補彩作業を行い、当館へ寄贈したい旨の申し出があった。

武井清は、日本山岳画協会の会員であり、北アルプスの岩や岩壁を描く人気作家である。

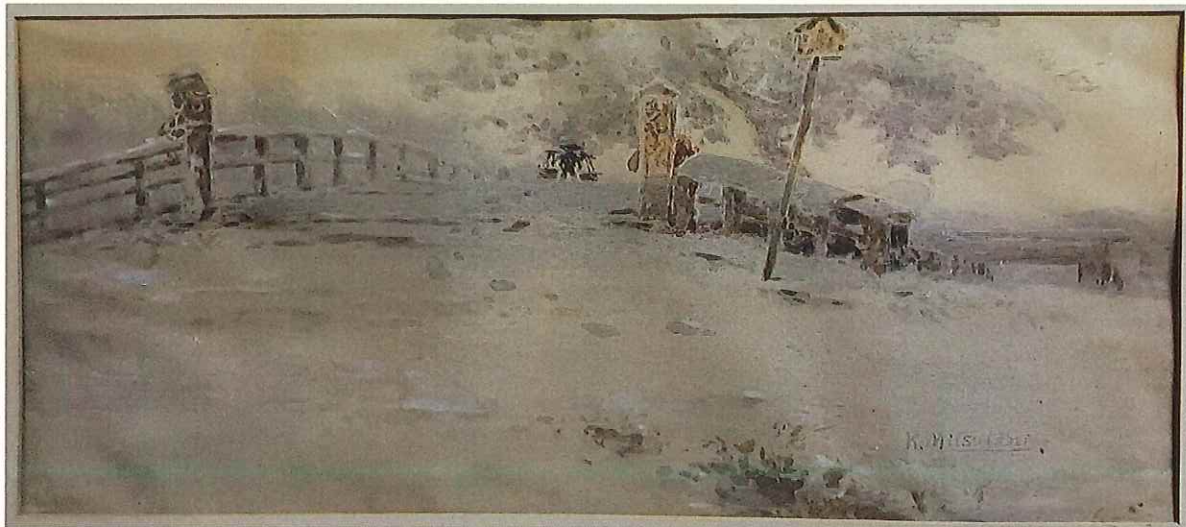
なお、平成23年に「小槍夕照」(50号)の寄贈も受けており、本作で2点目になる。

3 審議

② 購入

No.	作者名	作品名	制作年	技法・材質	サイズ
1	満谷国四郎	雪の橋(仮題)	1900年以前	水彩 紙	33.0 × 52.0

取得予定額 250,000円



【佐藤聡史 丸山晚霞記念館館長・学芸員】

本作は、明治33(1900)年に丸山晚霞とともに渡米し、ボストンをはじめ3都市で開催された「日本人水彩画家6人展」で展示、売却されたものと考えられる。現在は県内在住の個人が所蔵している。額裏面に旧所有者のものと思われる英文の記述があるが、判読が難しい。

Japanese  
Water color  
Gift of Mitsutani  
× × × × , × × × × , Part of Japanese collection

満谷国四郎は帰国後、丸山晚霞らと太平洋画会創立に参加した。満谷の水彩画の現存数は大変少なく、貴重な作品である。額は傷みが激しいため、収蔵の際に額を新調を検討する必要がある。

【林誠 長野県立歴史館学芸員】

洋画家・満谷国四郎による水彩画である。満谷の水彩画は非常に少なく、明治30年代初頭に集中している。特に、明治33(1900)年に丸山晚霞らとともに渡米し、各地で水彩画展を開催した時に売却された作品がそのほとんどを占めると考えられ、本作もまた、その中の一点だろう。

季節は冬で、橋のある風景をやや見上げるような角度から描いている。雪の積もる橋の上には天秤棒で桶を担う人物が見える。全体的に退色が見られるが、満谷が渡米時に出品した水彩画とみて間違いはないだろう。取得予定価格も妥当と考えられ、丸山晚霞記念館の所蔵品として問題ない。

【滝澤正幸 上田市立信濃国分寺資料館学芸員】

丸山晚霞、満谷国四郎、吉田博らによる明治33(1900)年の北米旅行と水彩画展の成功は、帰国後の太平洋画会発足に至る近代美術史上のエポックである。現地で好評を得たという彼らの水彩画の実態は、近年、その里帰り作品により次第に明らかになってきている。

吉田博の同期の作品は、日本的な水蒸気を含んだ情緒的でもある淡い光に包まれていて、本作も雪景色と思われる淡いモノトーンが特徴で、構図的にも主景の橋は上半分に限定され、主役は手前の薄い新雪であり、行商人の足跡と後ろ姿が作品に物語性と抒情性を付加している。こうした東洋的な空気感を前面に押し出した彼らの作風が、彼の地の人々を魅了し、またその成功が帰国後の彼らの自信につながったのだろう。本作は日本水彩画黎明期に於ける重要作品であり、記念館のコレクションに加えるに相応しい。

# 丸山晚霞記念館 作品取得基準

## (1) 丸山晚霞および関連作家

洋画指導者

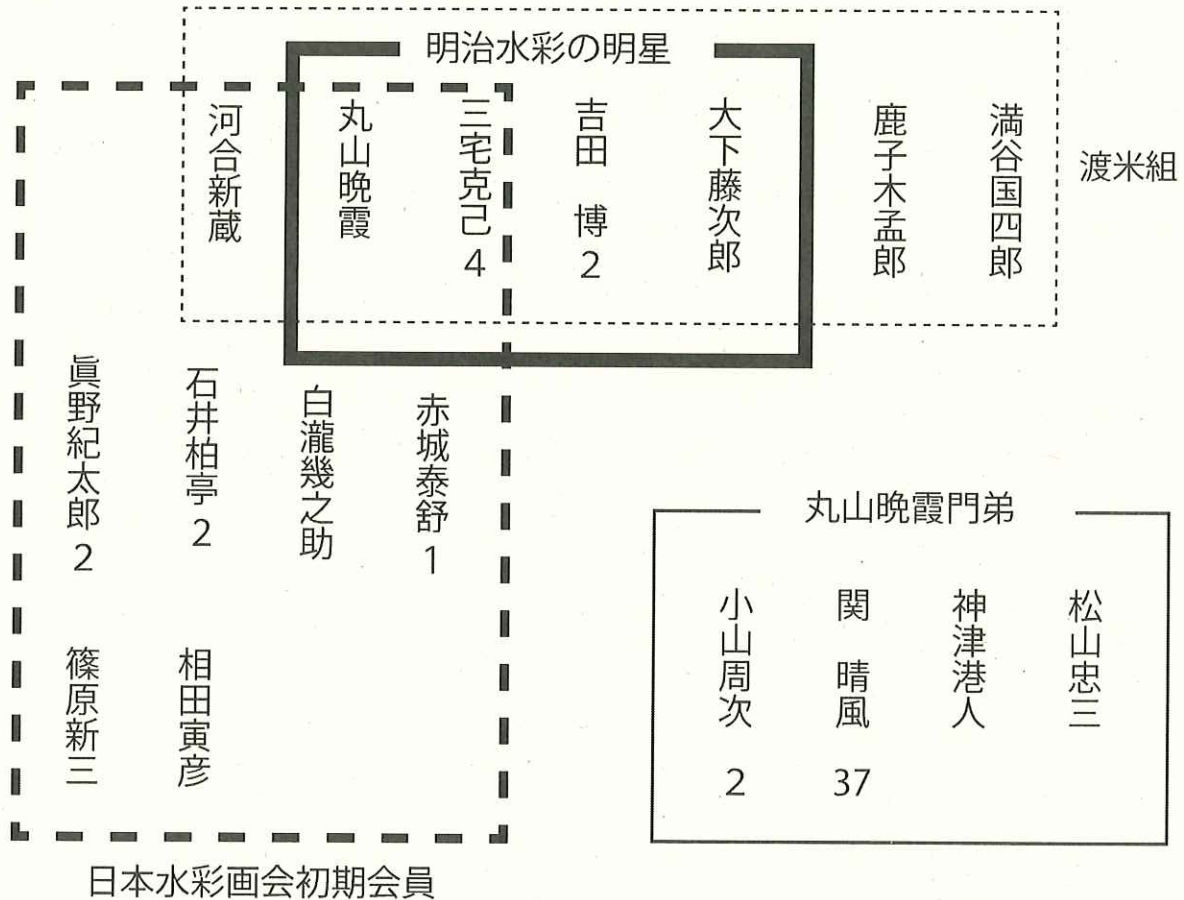
本多錦吉郎	小山正太郎
-------	-------

### 丸山晚霞重要作品数 (種類別全点数)

日本アルプス写生旅行デッサン 40 (499)

1894年～1912年の水彩画 55 (95)

参考：掛け軸 15、屏風 4



明治の水彩画を丸山晚霞を中心に体系的に収集する

- 1 丸山晚霞の最盛期とされる 1894年～1910年までの水彩画
- 2 同時期の水彩の明星と呼ばれた作家 特に三宅克己、吉田博
- 3 日本水彩画会初期会員

# 丸山晚霞記念館 作品取得基準

## (2) 丸山晚霞略年譜と作風の変遷

	1867年(慶応3)	信濃国小県郡祢津西町生まれ	
修業期	1888年(明治21)	上京し、「彰技堂」で本多錦吉郎に師事	習作の域を出ない。資料価値として重要
最盛期 1894年(明治28)～1910年	1895年(明治28)	沼田付近で吉田博と出会う	水彩画に開眼。吉田博の影響が大きく、風景を忠実に画面に表現しようとする。
	1898年(明治31)	吉田博と「日本アルプス写生旅行」を行う	「信州の空気が画面に漂っていて、見る私たちをして浅間山の山麓に引きずられていくような力強さを感じた」三宅克己評
	1900年(明治33)	盟友4人と渡米、現地で吉田博らと合流。3都市で「日本人水彩画家6人展」を開催し、大成功を収める。約100点を販売。	渡米前に、三宅克己と知り合う。海外の影響を受けた三宅克己の作風に影響を受ける。
	1901年(明治34)	アメリカから渡欧し、欧州を巡遊し帰国	
	1902年(明治35)	太平洋画会(現太平洋美術会)の創立に参加。小諸義塾図画教師に着任	欧州の田園画家のライフスタイルに憧れ、田園風景、農村風景に秀作が見られる。島崎藤村らと交友。文学にも影響を与える。
	1905年(明治38)	小諸義塾を辞し上京。太平洋画会研究所の水彩画科教師となる。その後大下藤次郎らと水彩画講習所開設。	水彩画全盛期を迎え、著書も手がける。「和装水彩」と称した、掛け軸を精力的に描く。秀品も見られる。
1911年(明治44)～1920年頃	1911年(明治44)	2度目の渡欧。欧州各地で写生を行う	ウィリアム・ターナーに影響を受けて帰国。画風が変化する。
	1912年(明治45・大正元)	帰国、帝国ホテルで滞欧作の展覧会を開催	欧州風景は現存多数。秀品は3割程度か。
	1913年(大正2)	日本水彩画会創立	後進の指導や水彩画の普及に奔走する。掛け軸などを多作。現存多数。作風は平凡。
晩年	1923年(大正12)	関東大震災救済義援金を募るため、中国、東南アジアで作品を頒布	このころから、指導者として多忙を極め、作品は衰える
最晩年	1936年(昭和11)	吉田博らと日本山岳画協会の創立に参加。郷里祢津村にアトリエ「羽衣荘」を新築	
	1942年(昭和17)	死去。享年76。日本水彩画会から「水彩画家丸山晚霞(遺稿集)」が刊行	